あぜみち

◆あぜを越えて

「今の日本の社会は油上（石油の上）の楼閣だ」という話を聞いて以来、私は自分のできる事として自給自足を目指してきた。都会のサラリーマン家庭に育ち、受け継いだ知恵も技術もない私の種蒔きは、野菜作りの本を片手にプランターから始まった。やがて近所の畑十坪、Ｉターン先の長野では、自給に十分な広さの畑を借りて耕すようになり、共同の田んぼグループにも入れてもらった。プロが作るのだとばかり思っていたお米を、グループの一員として初めて収穫した晩、星に手が届いたように嬉しく、お米の粒は宝石のように輝いて見えた。

長野に来て早十二年。今では自給野菜の他、小麦、ライ麦、大豆などの販売も多少行っている。すべて無農薬・無除草剤・天日乾燥のせいか、味が良いと言ってもらえるのが何より嬉しい。昨年は、遺伝子組み換え食品反対の大豆畑トラストに友人と取り組んだ。十二名の参加者の多くは畑仕事に縁のない人々だったが、大豆畑で作業した後の笑顔は充実感に満ち、清々しかった。鳩の食害にあいながらも、「みんなの大豆」の収穫にこぎつけた脱穀作業の日、一番ニコニコしていたのは私かもしれない。今後、希望者と共に豆腐作り、みそ作りなどを予定している。かつての私のように、普段食べている物がどれだけの手をかけて作られるのかを知り、それらを自分の手で作り出すことの面白さや楽しさを味わってもらえたらと思う。そして、あぜを越えて田や畑に入り、油上ならぬ地上に足をつけて暮らす仲間が増えることを願っている。

一方、自給自足の「住」の分野では、地域の木を使い、近所の人々と共に暮らすため、自らも参加する「村の家作り」を理想とし、未完成の家に住み始めて二年半、今もゆっくり作り続けている。地域材を使った「村の家作り」に関しては、昨年出版された『木の家三昧』（浜田久美子著、発行コモンズ）という本に綴られているので、興味のある方はご覧いただきたいと思う。

（長野県伊那市　竹内恵子
農業・インテリアコーディネーター）